

1. 原発事故後の農業と地域社会の再生を読んで

私がもし農家で、原発事故にあってしまったらもうあきらめてしまうと思う。だから飯舘村の農家さんたちがここであきらめるわけにはいかないと奮い立っていたことがすごいと思った。までい工法（手間暇かけて、心を込めて、丁寧にという意味の方言）は農家自身が田んぼに穴を掘り削り取った除染土を 50 cm~100cm の深さに埋めて汚染されていない土を被せるというシンプルな方法である。放射性セシウムが土粒子と強く吸着し土粒子が移動しない限り、放射性セシウムは移動できないというものだと知り、そのような工法を、見つけ出すのは簡単ではないと思った。しかし、データを出されても不安感がぬぐえないという人があるのは理解できる。マニュアル通りに除染作業に取り組んでも除染土の処理や、排水不良、土壌肥沃度の低下やコミュニティの崩壊などの問題が起こってしまうというのは、全員が納得できる完璧な方法をつくるのは難しいのだと考えた。また若者が戻ってこないという問題は被災した多くの自治体が抱えている問題である。それぞれの自治体が抱える課題を解決していくために私も考えていきたいと思った。

2. 開発途上国における農業農村開発と DX を読んで

コロナ禍の前後で起こっていた開発途上国の DX について論じている文章であった。開発途上国の DX（デジタル・トランスフォーメーション）を考察する上で欠かせないことは、世界的に社会の DX があらゆる地域で急速かつ同時に進行しているという事実で、グローバルレベルで DX による社会変化が起きた要因は、インターネット接続が可能なデータ通信環境、誰もが常時使用できる情報端末の普及、多様なデータの収集の3つが世界各地で同時に使用できるようになったからとあったが、個人的に発展途上国では携帯やインターネット通信環境が整備されていないと思っていたため、開発途上国も含めて、人間の居住地域であれば携帯電話の通信網が利用可能で、多くの地域でインターネットを利用するために3G以上の通信ができることには驚いた。2010年代以降のスマートフォンの普及や2000年代から普及したクラウドサーバ、この3つがそろったことにより、技術の革新は大きく進んできたのだなという印象を得た。また様々な規制がある先進国よりも、規制が少ない発展途上国のほうが革新的なデジタルサービスが登場しやすいのは縛りが少ないことで柔軟な発想ができ、そのことを実行できるというのが大きいのだろうと考える。世界がDX化の進行によって、投入材の供給（農民融資）、農業生産などでさまざまな農業関連のデジタルサービスが出現しておりインドネシアなどの発展途上国でも日本よりも農業のデジタル化がかなり進んでいるなど危惧している。昨今スマート化やITを活用した農業をしようとしているようであるが、実際に日本はそれができる技術があるにも関わらず様々な問題から進まずにいる。農業の成長のためにはデジタル化にいち早く取り組めるかどうかがかギになると考えた。

